子どものための造形展
―その実践と考察―

Art Exhibition for Young Children
―An Examination through Some Practices―

村　田　夕　紀
Yuki MURATA

造形展の現状と傾向として、巧拙を比較する場になってしまっていること、保育者の表現活動の場になってしまっていること、廃止する動きが出てきていることに疑問を持った。そこで、本来、造形展のあるべき姿を、子どもの主体的表現を中心に据えて保護者の受容･共感を促す「子どものための造形展」とし、造形表現活動の考え方・展示のあり方・保育者のあり方や保護者に働きかける意味などを示した。また、「子どものための造形展」を実施した事例を、展示方法を中心に具体的に紹介した。さらに、保育者の協力を得て、保育者が伝えようとした事柄と当日の保護者の反応･発言を調査し、造形展に込められた思いが伝わったか否かを分析･考察した。加えて調査結果と保育者とのカンファレンスから、問題点や課題を抽出し、その解決・解消方法のアイデアを示した。

キーワード：子どもの主体的表現　受容・共感　発達・成長　子ども理解

１．造形展の現状と傾向

子ども達の作品を展示し、子どもの成長を保護者に伝えるものとして、造形展（作品展）を大きな行事の一つとして取り組んでいる幼稚園や保育所（園）が多くある。楽器の演奏や合唱、劇などの発表会に比べ、保護者それぞれのペースで、子どもと一緒にじっくり鑑賞できるというメリットがあり、制作者である子どもの思いに耳を傾けたり、他の子ども達の表現にも触れたりすることができる。一人の子どもを囲って両親、兄弟姉妹、祖父母と家族総出で鑑賞する姿も見られる。しかし、子どもの言葉に耳を傾け、そこに込められた子どもの思いにゆったりと寄り添う大人の姿に出会うことは少なく、子どもの作品をどのように読み取れば良いのか、分からずに戸惑っているようにも見える。また、出来映えの良し悪しに目を向け批評したり、他の子どもと比較して優劣を付けたりといった保護者、家族が多いように感じる。子どもの作品の巧拙を評価する場となっている傾向にあるのは否めない。巧拙の差異をなくすために、保育者は、本来なら一人一人の個性や工夫を尊重した「誰もが・自分なりに」[1]表現できることを目指すべきところが、「誰もが・同じように」[2]表現することを求めた指導になってしまうのである。

保育者の立場から見ていくと、より上手く、立派に見せたいという気持ちや、他のクラスに負けたくないという競争意識が働き、展覧会として「見せる行事」になりがちなのが現状であろう。その結果、発達段階以上の内容を子どもに求めたり、指示どおりに作ることを強要したりする傾向にある。ここでは子どもの表現をいかに引き出すかといったことではなく、出来映え良く作品を仕上げるためにどれだけの指導ができるかといった指導力が評価されるのである。また、テーマや内容を保育者が決め、子どもの手を借りて制作し、保育者の思いで展示するといった、「保育者の表現活動」となっている造形展も多く目にする。ここでは、保育者のアイデアや発想が評価されるわけであるが、苦手な保育者にとっては、かなりの負担となる。

また、3歳児未満の乳児[3]の造形展においては、絵の具を塗ったりシールを貼ったりといった子どもの作品を使って、保育者が何かに仕立て上げ展示するといった造形展がほとんどで、子どもの作品というよりは、保育者の作品となっている。各クラスでテーマを設定していることもあるが、子どもには全く興味がなかったり、テーマ自体が分からなかったりすることのほうが多い。これでは子どものための造形展とはならず、逆に保育者の負担が増える一方である。

このような事情から保育者の負担を軽減するためにと、造形展を廃止する園も出てきている。そうなると、準備や片付けに時間がかかるような造形活動は敬遠され、日常の活動の中から、造形表現に取り組む機会が極端に少なくなることもある。また3歳児以上の幼児[4]の場合には、造形展に向けての活動がなくなると、指導性の全くない、子どもに任せきりの自由で気ままな活動になる傾向が増幅する危険もある。発達段階に即した、表現活動に必要な指導内容があってこそ教育の場となるのであろうが、このような場合ではただ材料をもてあそんでいるだけの遊びとなってしまう。発想したことを色や形に実現するために工夫する中で、粘り強く試行錯誤を繰り返したり、そこから達成感を味わったりする経験が乏しくなるのである。

2．造形展のあるべき姿

子どもの主体的な表現を中心に据えた造形表現活動の内容を子どもの成長の記録として保護者に提示するのが本来の造形展であろう。園によってめざす造形展のあり方は違っているようだが、ここでは保護者に、子どもにとって無理のない自然な活動を見てもらい、ありのままの子どもの姿・成長を伝え、その子なりの造形表現を受け止め、認めてもらえるような受容・共感型の造形展をあるべき姿とし、それこそが「子どものための造形展」であると考える。改めて「子どものための造形展」とはどのようなものかを、以下具体的にまとめてみることにする。

乳児の造形展では、作品の展示以外にも、造形表現遊びの活動記録を写真と共に展示することで、子どもの成長過程を示すだけでなく、夢中になって遊ぶことの大切さを伝えたいものである。普段の園での活動を見せることで、作品づくりではなく、素材としてのモノに関わって遊ぶことの重要性を訴えたい。さらに、一緒に遊ぶ場を設置することで、実際に目の前で繰り広げられる子どもの遊びを見ることができ、子どもの興味・関心のありかや子どもへの関わり方なども学べる保護者参加型の造形展となる。

幼児の場合には、保育者からの適切な指導や援助の下で、描いたり作ったりといった活動を楽しみ、試行錯誤しながら、主体的にその子なりの造形表現にたどり着くことを目指している。

子どもの発達に合わせた適切な指導は成長を促し、必要に応じた援助は活動意欲を高め、その中で子どもは“学び”を実感することになる。またこの時の活動は保育者の指示によるものではなく、あくまで子ども自身が試行錯誤の中で選び取った自主的な活動であることが重要であり、このことが子どもの達成感・満足感を大きくし、自信を持って活動に向かわせ、「誰もが・同じように」ではなく「誰もが・自分なりに」の主体的な造形表現に向かわせるのだと考えている。大きな達成感・満足感を得た子どもは、保護者に向かって自信を持って自分の作品を語ることができるが、出来映えの良い上手な作品でも、保育者の指示通りに描いたり作ったりしたものでは、子どもは目を輝かせて自分の作品を語ることはない。子どもが自ら造形表現を語り、保護者はそれに耳を傾ける……そんな親子のコミュニケーションの場としての造形展も「子どものための造形展」と言えるだろう。

造形展では、一人一人の子どもが多様な姿を示してくれるが、その子の思いや特長を、それぞれの保護者に伝えるための工夫も必要とされる。保護者に子どもが思いを込めて作品づくりをしていることや、活動の見どころなどを話すのはもちろんのことであるが、どのような内容を指導し、それらを基に一人一人の子どもが如何に工夫しているかを語ることで、発達段階に即した教育の内容と子どもの成長を同時に伝えることができるだろう。保護者が子どもの作品の出来映えを評価したり、徒に他児と比較したりするのではなく、子どもの作品や遊ぶ姿をよく見て感じ、理解することができるような語りが必要なのである。

このように、子どもの姿や成長を伝える造形展にすることで、保護者の子ども理解を促すだけでなく、子どもの作品や活動を通して保護者と語ることで、保育者、保護者間のコミュニケーションを円滑にすることができるのではないかと考える。それにより、保護者の目が「保育者の表現活動」を評価することに向くのではなく、保育内容や子ども理解に目を向け、園全体の保育のあり方に理解を示してくれるようになるのではなかろうか。また、保護者も保育者も子どもの作品や遊ぶ姿をいとおしみながら見ることが望ましく、大人の愛情に囲まれ、自分なりの表現を認められ評価されることで、子どもは自信を、さらには自己肯定感を持ち、感性がより豊かに育まれていくと考えられる。

以上の問題意識と観点から、０～５歳児が在籍する保育園において、このような造形展のあり方について提案し、「子どものための造形展」の参与観察を試みることにした。

３．造形展の事例

（１）観察園について

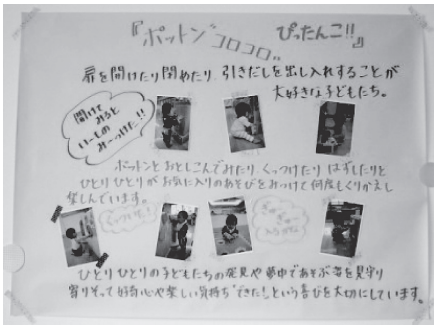
大阪府茨木市の姉妹園３園（仮にA園、B園、C園とする）に協力頂く。筆者は、本園であるA園（平成27年４月より保育園から幼保連携型認定こども園に移行）では平成13年度より保育の中での造形表現活動に関わり、毎年造形展を開いて今回で14回目になる。またB園（平成24年４月より０・１歳児のみの保育園として開園）とC園（平成26年４月より幼保連携型認定こども園として開園）には開園当初から関わり、造形展はB園で３回目、C園では初回となる。

造形展の取り組みとして、子どもの自然な姿を見てもらうために、ふだんの造形表現遊びでの活動を中心に据えた以下のような展示を試みた。

（2）活動記録の展示

乳幼児の造形表現遊びは、物的環境（素材としてのモノ、活動の場）や人的環境（友達や保育者など身近な人）に関わる遊びである。遊びの質やプロセスが大切であり、活動の中での行為そのものに意義がある。そのため活動の結果を形あるものとして残せないこともある。このような場合、活動の写真や解説文、子どもの言葉などを添えて紹介することで、造形表現遊びがどのようなものか、また、その時の子どもの様子はどうだったか、どのような成長があったのかなどを分かりやすく伝えることができる。

乳児クラスでは、造形表現遊びの内容が保護者に分かりづらく、また、子どもの言葉では伝えきれないことが多いため、活動内容の解説や子どもの思いを代弁したコメント、子どものつぶやきなどを記入し、写真と共に展示することにした。内容は子ども達が特に興味を持って取り組んだ活動に絞り込み、一人一人の子どもが夢中になって遊ぶ様子や表情、成長の過程などを紹介することにした。



活動記録の展示（0歳児）

幼児クラスでは、日頃の活動についてはその都度、保護者に話している様子が窺えたので、幼いながらも自ら語り説明することを期待して、写真のみの展示とした。活動別に分けて展示することで、内容が伝わりやすくした。

（3）遊びの場の設置

乳児の造形展では、造形表現遊びの結果としての作品や活動記録の展示だけでなく、親子で一緒に遊ぶコーナーを作り、できるだけ保護者に話しかけるようにした。前述の活動記録の展示と絡めて、どのように遊ぶのかが分かるように設置した。園でどのような造形表現遊びをしているのかを実際に見てもらうことで、展示されている活動記録も理解されやすく、さらに、作品にどのように結びついていくのかが分かりやすくなる。結果としての作品を評価するのではなく、どのような遊びの中で生まれた作品なのかを示すことで、作品から子どもの遊ぶ姿を感じ取ってもらえることを念頭に置いて取り組んだ。

また、月齢や年齢、発達過程により、興味・関心のありかが異なるため、いろいろな遊びに展開できるよう、遊びの環境を整えた。

段ボールと空き箱で引き出しを作り、中には子どもが興味を持って遊べるモノを入れておいた。

ただ散らかすだけでないこと、どんなモノに興味を持っているのか、それを使ってどのように遊ぶのかということをじっくり見て、子どもを感じてもらえるような場を作った。その中で、親子のかかわりを見守ったり、同じ遊びを一緒に楽しめるよう支援したりするよう心がけた。この遊びのコーナーは、日頃、引き出しを引っぱり出して散らかしてしまう子どもの姿からヒントを得て考えたものであり、子どもの成長にとって、このような探索活動が大切なものであることを説明するようにした。

幼児の遊び場としては、作品展示の中にお店屋さんを作って、ごっこ遊びを楽しめるようにした。また、描いたり作ったりできるコーナーを設置することで、保護者や友達と一緒に遊べるような工夫をし、子どもが造形活動を楽しんでいる様子を実際に見てもらうことができるようにした。

（4）作品の展示

乳児と幼児では、作品の質やあり方が異なる部分が多い。乳児では、設定されたテーマに向かっての作品づくりではなく、素材としてのモノに関わる活動の中で、行為そのものが楽しく感じられることが重要であり、その行為の痕跡や成長の過程が分かるものを作品として展示することが望ましいと考える。

幼児の場合には、子ども達と一緒に話し合う中で、テーマを設定し制作に向かう。その活動のプロセスや結果が色や形に表われ作品になると考える。

このような子どもの表現形式の違いを考慮し、ここでは、乳児と幼児に分けて展示方法を考える。

①　乳児の作品展示[5]

なぐりがきやシール貼りなど4月より継続的に行われている活動は、表現の変化が分かりやすいものを選んで展示した。

いろいろな素材を使った造形表現遊びの痕跡を作品として展示するには、一人一人の子どもの遊びの特長やこだわりが上手く伝わるように、特に展示の工夫が必要となる。例えば、作品の下に色画用紙などを敷いて作品を引き立たせたり、一人一人の「だいじ」をきれいな箱にまとめて入れたりといった演出である。これは、何げない子どもの遊びの痕跡を、意味のある大切なもの“作品”として引き立たせ、保護者にアピールすることが目的であり、演出に凝り過

ぎて保育者の表現活動となってしまうようでは、本末転倒である。演出の目的を意識し、過度なものとならないような作品展示を心がけるようにした。また同じ素材を使った設定保育での作品を展示することで、素材は同じであっても、一人一人の表現が異なることに気付いてもらえるようにし、このころからすでに「誰もが・同じように」ではなく「誰もが・自分なりに」を目指した造形表現遊びに取り組んでいることを感じてもらえるようにした。

活動記録と共に、作品を展示

また、活動時の写真を作品と共に展示することで、夢中になって遊ぶ子どもの様子や、遊びの内容を分かりやすく伝えた。さらに、設定保育の中での全体の活動の流れや内容を伝えたい場合には、作品と共に前述の活動記録の展示をし、照らし合わせて鑑賞できるようにした。

② 幼児の作品展示

幼児クラスでも、絵画作品は４月からの取り組みの中で、その子らしさが表われている作品や一所懸命取り組んでいた作品、子どものお気に入りの作品などから２点を選び、壁面に展示した。

立体作品においては、子ども達の興味・関心から造形展のテーマを引き出し、何を作るか、どんな部屋にしたいかを話し合いながら、子ども主体で造形展を作っていけるようにした。

個々の作品の展示では、「上手・下手」という評価ではなく、如何に個性を発揮してそれぞれが工夫を重ね表現しているかを評価してもらえるような作品展示にした。

さらに４、５歳児クラスでは、子ども達がイメージを出し合って、役割や持ち場を分担し、自主的に、かつ協同的に制作した作品も展示した。ここでは、保育者はアドバイスすることに留まり、子どもの主体性を尊重し、展示空間を子どもの手で構成することにした。

個々で作った電車を繋ぎ合わせ、数人で協力し合いながら、積み木や木片、木の枝などを使って線路やトンネルなどを作って飾っている。

便宜的に「活動記録の展示」「遊びの場の設置」「作品の展示」と分けて造形展を紹介したが、3つのねらいが分離しているわけではなく、互いに要素が絡み合い、複合的に展示されることになった。

以上のように、造形展を実施し、さらに保育者の意図したことを保護者がどのように受け止めてくれているかを確認するために、聞き取り調査をすることにした。

（5）保護者への聞き取り

①　聞き取り調査の方法

右図のような調査票を作成し、子ども一人一人に対して「保護者に伝えたい内容」を事前に記入しておき、造形展当日の「保護者の反応・言葉」をメモする方法をとった。

「調査票」

名前　　（　　歳　　ヵ月）

保護者に伝えたい内容	保護者の反応・言葉

「保護者に伝えたい内容」については、申し合わせの上、以下のように文書化した。

●成長・発達の様子を伝える

・成長の様子：４月にはこんな様子で…
今はこんなことができるようになりましたよ。
・遊びの様子：指先も器用になって…小さいものも摘まんで…など。
・なぐりがきの様子：手や肘の運動機能が発達してきたので…グルグル力強く描けるようになってきて…など。
・シール貼りの様子：貼っている時の様子や、その子なりの貼り方・こだわりなど。

●子ども理解を促す。

・子どもの興味・関心の移り変わりを伝える。
（こんなことに興味を持っていました。今は○○に夢中です。など）
・大人の目からはつまらないこと、ただのイタズラに見えることでも、子どもはその中で、いろいろなことを学び成長している。
・生活、遊び、学びは分けられるものではなく、子どもはそこからたくさんのことを学んでいる。
・いろいろなことに好奇心を持って探索したり、試行錯誤したりすることは、子どもの成長には欠かせないものである。
・一人一人の子どもの思い・工夫を解説する。
・子ども自身で語ることができる場合には、子どもの語りにじっくり耳を傾け、思いをしっかり受け止めてもらえるよう促す。
・基本的な指導内容とそれらを基に子ども達がどのように展開していったかを伝える。

・子ども達が協力し合って展開していったところを紹介し、内容を解説する。

以上をガイドラインとすることとした。

話し合いの中で、「比較するのではなく、子どもそれぞれの表現を受容･共感するように促す」ことも口頭で説明を加えたが、普段から保育の基本として意識されていたこともあり、文書化するときに漏れてしまっている。この事に後で気付き、調査への影響が危ぶまれた。

また、造形展後の保育者とのカンファレンスによるクラスごとの聞き取り調査も行った。ここでは、調査票には表われない問題点や課題を聞き取ることができた。

② 調査結果と分析、及びその考察

調査対象は０歳児26名、１歳児38名、２歳児28名、３歳児35名、４歳児23名、５歳児26名の子どもの保護者であり、有効な調査は176名中167名であった。無効となった９名は、当日欠席で、聞き取りができなかった保護者である。

調査結果より、まずは、他と比較して表現の巧拙を見るのではなく、一人一人の子どもの思いに寄り添い、それぞれの子どもなりの表現を受け止め、認めることができているかどうかを「受容・共感する姿」で量る。次に、子どもの成長を保護者に提示するのが造形展の一つの目的であることから、それが達成されているかを量るために、保育者とのやりとりの中での保護者の「成長・発達に気付く言葉」をカウントすることとした。さらに、子どもの行為や表現の意味を感じ取ったり、探索や試行錯誤を繰り返す中で自ら成長に向かう子どもの自主性に理解を示したり、一人一人の子どもが自分なりに工夫し展開する中で個性を発揮していることがしっかり伝わり、子ども理解を深めてくれているかどうかを「子ども理解を深める反応」で量ることにした。

調査票から、以下のようなことが読み取れる。

「みんな、あんなんしてるのに…」「○○ちゃんは顔が描けてるのになあ…」などと、本稿冒頭で述べたような他児と比較して作品の巧拙を評価する保護者は３名に留まった。これに対し、夢中になって遊ぶ子どもの姿をいとおしみ寄り添う保護者の姿が見られたり、「○○ちゃん、すごいなあ！」「かわいいの作ったね」「なんか、うちの子っぽいです」「本当に楽しんで作っていることが伝わってくる…」などと、受容･共感する言葉を表す保護者数は83名にのぼった。このことから、他児との比較ではなく、一人一人の子どもの表現を感じ取ることができる造形展に、概ねなっているといえるだろう。もっとも、申し合わせの文書に欠けていたにもかかわらず、このように他児と比較する姿が極端に少なかったのは、造形展当日の保護者への解説や関わりによるものだけでなく、当該園が日常的に保育の中で子ども主体の造形活動に力を入れており、もともと保護者の造形活動に対する理解度が高かったことも影響していると考えられる。調査票の集計結果では、この「受容、共感する姿」が最も多かった。

保護者の反応として次に多いものは、「こんな遊びもするようになったんですね」「こんなことできるんだ！」「成長に驚いている」などと「子どもの成長・発達に気付く言葉」であった。

対象者中67名が、時には驚きと共に子どもの成長を喜んでいた。特に２歳児では、色や形、お気に入りの行為などにこだわりを見せるようになり、それまでの表現とは大きく様変わりする時期にあたるため、保護者の驚きも大きかったものと推測される。また３歳児においては、顔や頭足人が現れ、保護者にも子どもの表現が読み取りやすくなることから、成長を実感することになったと思われる。実際、調査結果から発達や成長に言及したのは、２・３歳児の保護者では36名のところ、０・１歳児では22名、４・５歳児では９名であり、２・３歳児の保護者からの成長実感は比較的多いといえるだろう。とりわけ、日々の生活で成長・発達の著しい０・１歳児でよりも、こと造形分野においては、２・３歳児の保護者の反応が大きかったことは注目に値する。

「子ども理解を深める反応」では、０歳児７名、１歳児６名、２歳児５名、３歳児３名と年齢が上がるにつれ減少しており、４，５歳児では０名という極端な結果となった。

乳児の「遊びの場」を体験した保護者からは、「こんなに落ち着いて遊ぶのですね」と夢中になって遊ぶ子どもの姿に驚いたり、「家では…DVDばかりを見ている…参考にして家でもしてみようかな」「家でも確かにそうですね」と家庭での子どもの様子を絡めながら我が子を理解しようとしたり、「家でも作ってみます」と子どもが遊んでいた手作り玩具に興味を持って家庭での子育てに役立てようと考える保護者の姿もあった。また、「同じ遊びをしているのに、一人一人違うようになっている…」という記述からは、それぞれの表現の違いや良さを理解しようする保護者の様子が窺える。

乳児の場合、造形表現の読み取り方が難しいことや、子ども自ら言葉で十分に語ることができないことで、活動内容を保育者が解説したり子どもの思いを代弁したり補足したりすることが多い。また、結果としての作品よりも行為そのものを大切にするということを、保護者に伝えようとする意識を保育者が強く持っていたことで、子ども理解を推し進めることになったのではないかと考えられる。

それに対して、幼児の場合には、作品の意味が分かりやすく、子どもも自らの言葉で語ろうとすることから、子どもの語りに任せようとするあまり、保護者への説明が疎かになったのではなかろうか。そのように考えると、乳児と幼児の調査結果の極端な違いが理解できる。

さらに注目すべき点は、特定の保育者の調査票に、保護者の子ども理解を窺わせる記述が集まっていることである。保育の内容や子どもの姿を伝えるだけでなく、活動の意味や保育のねらいはどこにあるのか、また一人一人の子どもが如何に個性を発揮して表現していたか、自らの力でどのように工夫し展開していったのかなど、保護者の子ども理解に結び付く内容を伝えようとしている保育者は成果を得ている。それに対し、上手く伝えられない保育者は満足な成果が得られておらず、極端な差異となって表われている。子ども理解を促すためには、保育者の力量に負うところが大きいことがわかる。このことは保育者が予めメモしていた「保護者に伝えたい内容」欄を検証することで明らかになった。

４．造形展の振り返り

造形展終了後のカンファレンスでは、幼児クラスの保育者より「…一生懸命語る子どもの姿

があった。自分の言葉でほとんど語ることができるので、保育者の補足説明は必要でないことが多かった」「…子ども達は生き生きとした表情で保護者に語っていた…」と子どもの語りに依存していた様子が窺える。これは、子どもの語りを傾聴するように促すという申し合わせを意識するあまり、内容の説明を十分に補足できなかったのではないかと推測される。実際、懸命に語る子どもと、いとおしむように耳を傾ける保護者との間に割って入ることもできず、説明を補足するタイミングを見つけることも難しかったようだ。何をどうしたということに留まらず、その行為の意味・意義を解説し、補足することが望まれるが、調査結果からもそれに成功したとは言えないだろう。

乳児のカンファレンスでは子どもの作品について話し合われた。「…子どもにとっては、完成された作品というより、自分のモノといった感覚で見ており、触って作り変えた作品をまた元に戻して、自ら展示する姿があった」「子ども達は、作る過程はとても生き生きした表情で取り組んでいたが、結果として残った作品にあまり執着している様子はなかった」などと、子どもには作品という意識は見られず、完成形あるいは最終形として捉えていない。単に大切なもの、大事なものとして位置づけられているようだと確認された。保育者にとって造形展は大きな行事であり、造形に関する一大イベントではある。保護者にとっても意義のある行事であるといえるだろう。しかし、実は子どもにとってはそれほど大きな意味を持っていないかもしれない。子どものための造形展を標榜するなら、ありのままの子どもの姿を見せることこそが、あるべき姿であろう。だとすれば「1．造形展の現状と傾向」で触れたような、“保育者の表現活動”となってしまっている造形展では、子どもの姿は歪められてしまう。これでは保護者にとっても造形展の意義は失われ、子どもにも保護者にも共に意味をなさなくなるだろう。

とはいえ、調査票の作成は当初予定していた以上の結果をもたらしたと言えそうだ。元々、今回の造形展が保護者にどのように受け止められたかを調べることが目的であった。そのため保育者は、当日保護者に伝えたい内容をまとめ、メモしておくことになったが、このことが一人一人の子どもに改めて目を向ける機会となり、少なからず保育の意識を高めることになったようだ。「保護者に伝えたい内容」をまとめることで、保育者も自らの保育をかえりみて、気付くことが多かったという声を聞くことができた。

また、乳幼児を通じて、実施運営上の問題点や課題なども指摘された。

5．問題点と課題

前に述べたように、一部の保育者だけに偏って子ども理解を示す反応や言葉が保護者から寄せられている。それ以外の保育者と比較してその違いがどこにあるのかを見ていく必要があるだろう。まず、調査票の「保護者に伝えたい内容」を比べてみると、どちらも活動の紹介や身体機能の発達、成長の歴程をメモしているが、一部の保育者だけが、子どもの活動の意味や行為の意義について述べようとしているのがわかった。具体的には、子どもは身の周りにあるものに興味を持って遊ぶことや、家庭で大人を困らせるイタズラのようにしか見えなかったことが、実は子どもの発達を支える重要な探索活動であることに理解を促したり、またお気に入りの遊びは納得のいくまで夢中で遊んだり、繰り返し行うもので、それが意欲や集中力を高める

基になっていることを伝えようとしている。つまり、子ども理解を深めるような内容をあらかじめ伝えようとしていた保育者に、保護者の反応や言葉が集まったのであり、当然の結果であることがわかる。何を伝えたいか、何を伝えるべきかを考えて、一歩踏み込んで保護者に語りかけることができたか否かが、大きな違いとなって表れたのであろう。これらのことは、どこまでの内容を保護者に伝えるかという部分が保育者間で意思統一できていなかったことを物語る。いかに造形展前の多忙な時期とはいえ、もっと丁寧にじっくり話し合って、申し合わせるべきだったと悔やまれる。

加えて、日常の造形表現活動の中でも、保育者自身が活動の意味・行為の意義を十分に意識できていなかったのではないかと危惧される。日々の保育を見直し、保育者自身が子ども理解を深め、資質向上に努めることがこれからの課題となる。

また、造形展を実見して、まだまだ演出が過剰になっているように感じた。不必要な演出を排して、もっと子どもの活動記録の展示に力を注いでも良さそうだ。日常の造形表現活動の様子や成長過程、造形展に向けての活動のプロセスなどを、写真や図、解説文を交えながら展示する方法は、実際、保護者から「分かりやすい」と多くの支持を得ている。保育内容を理解してもらう上でも、子ども理解に向かってもらうためにも有効であり、この部分をさらに強化していくべきだろう。

さらに、カンファレンスの中で運営上の問題点として挙がったのが、乳児の「遊びの場」のあり方についてである。乳児の遊ぶ姿を保護者に見てもらう、また一緒に遊ぶことで子どもを感じてもらうことをねらいとして設置したが、兄弟姉妹や卒園児までこの「遊びの場」に参加し、小さい子どもにも配慮しながら遊ぶ姿もある程度見られるものの、遊びの質が変わってしまったことも否めない。多くの子ども達の遊びたい気持ちも受け止めたいところだが、乳児の遊びを、その質においても保障する必要があるため対応に苦慮しているのが現状である。

６．今後に向けて

あらためて今回実施した造形展によって見出された課題を、いかに解消して、今後の造形展につなげていくか、最後にレッジョ・エミリア保育やプロジェクト・アプローチの方法を参考に考えてみることにする。

（１）ドキュメンテーションの意義

まず、造形展前の申し合わせの精度を上げて保育者間の意思統一を図る方法として、日頃の保育を定期的に振り返り、造形表現の面でも、その活動の意味、意義を確認することが求められるであろう。できれば簡単な形であれ､記録文書化させることが望まれる。記録文書（ドキュメンテーション）は､レッジョ･エミリア保育の基礎概念の１つとして知られている。プロジェクトワークの中で得られる情報を、文章、写真、その他のメディアを用いて集め、注意深く整頓し記録したもので、レーラ･ガンディーニによると記録文書化には、いくつかの機能があり、「保育者たちに子どもたちをよりよく理解させ、彼ら自身の仕事を評価することが含まれ、したがって、彼らの専門的な成長を促進する…意思の疎通や、保育者たちの中で発想の交換を容

易にし、…保育者たちが学ぶ楽しさを生み出す」[6]ことだとされている。まさに求めていることと言えるだろう。しかし、プロジェクト型でない従来の保育現場に持ち込むには、その負担の大きさは別にしても、少なからぬ無理があるように思える。そこで、通常の保育カンファレンスの中で、定期的に造形表現活動について話し合う機会を設け、情報を共有化し、疑問点を検討し、気付いたことを発表して文書化して蓄積していくように提案したい。これによって保育者の意思がまとまり、意識も高まり、資質が向上することを期待する。さらに、造形展の準備に入る前の時期に、造形展での保護者対応について、丁寧に申し合わせすることも欠かせない。そこでの目的は何か？それを保護者に伝えるにはどう語りかければよいか？などを話し合っておく必要があるだろう。

・４月からの発達や成長の様子を、できるだけ系統立てて具体的に伝える。
・それぞれの子どもの表現の違いや良さを感じてもらえるよう解説する。
・子どもの行為の中の隠された意味を伝える。
・友達との関わりの中で得る協同的な学びの大切さや、それが社会性の獲得に繋がることを伝える。
・…
・…etc

などと、より具体的なガイドラインを作成し、正確に文書化することが求められる。

同時に、展示についても話し合い、

・子どものありのままの姿を伝える（演出に凝り過ぎて子どもの姿を歪めない）。
・子どもの気持ちも伝わるようにする（写真やメッセージなどを使って）。
・視覚的構成も考慮する（展示されている作品や設置されているコーナーは、何を伝えたいのかと関連付けされているべきで、不必要な演出は、かえって展示を分かり難くする）。
・題名の付け方に工夫する（乳児は１つのものを様々なものに見立てたり意味づけたりするので、イメージを固定化するような題名を付けるのではなく、活動の内容・行為が伝わるようにする）。
・…
・…etc.

といったガイドラインを作ってから、計画を練る必要があるだろう。

（２）トピックウェブの活用

子どもの活動記録の展示でも、レッジョ・エミリア保育での「展示（ディスプレイ）」方法がヒントを与えてくれた。レッジョ幼児学校の壁に掲げられたパネルには、現在進行中のプロジェクトがディスプレイされ、子どもの活動・問題解決・疑問の追及や保育者の説明・評価なども示されて、トピックやテーマが子どもによってどのように展開されて何を経験し学んだかが概観できるようになっている。プロジェクト・アプローチにおいても、保育者はプロジェクトを計画するための出発点としてトピックウェブ（文字通りトピックをウェブ状に、つまりクモの巣状に繋ぐように表示したもの）を作成するが、その形式を使ってディスプレイすること

で、活動の流れを大まかに感じ取ることができ、多方面で同時に行われる活動を全体像として捉えやすくなる。造形展において子どもの活動記録の展示を強化するにあたって、このトピックウェブ形式を導入し、より分かりやすい展示を目指すことを提案したい。しかし、比較的長期的な計画を念頭に置いて進捗状況を明らかにし、方向性を確かめて随時修正・加筆されていくのがトピックウェブであり、そのままを短期間の造形展に導入することは不適当と言えるだろう。そこでトピックウェブで示されるウェブ構造を、形式として子どもの活動記録の展示に応用することにする。

図１に示しているのがトピックウェブ[7]で、丸で囲んであるものがトピックを表している。そこから多様なイメージが広がっていることが分かる。アイデアは連続して起こる順序によって表されるものではなく、トピックを中心に放射状に伸びていくものとして表現されている。この構造図を子どもの活動記録の展示に応用してみよう。例えば乳児なら、ある素材を使って遊ぶことをトピックとすると、それらを用いた様々な活動が生まれたことを放射状に示す。それぞれの活動はグループ化され、グループごとに写真やコメント・メッセージと共にタイトルを付けて配される（図２）。幼児においても保育者によって指導された内容（技法など）を中心に子どもが工夫して表現を展開させていく様子を乳児の場合と同様にして示すことができる（図３）。

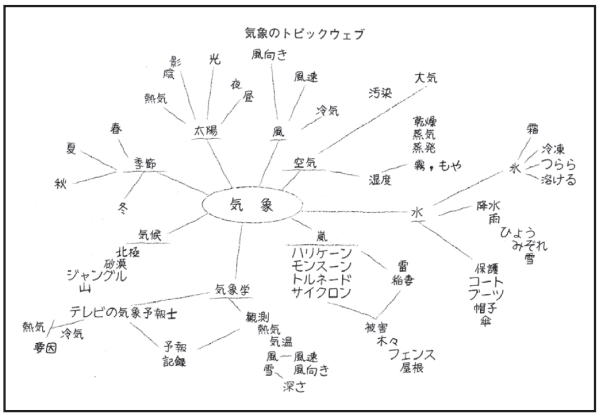


図１

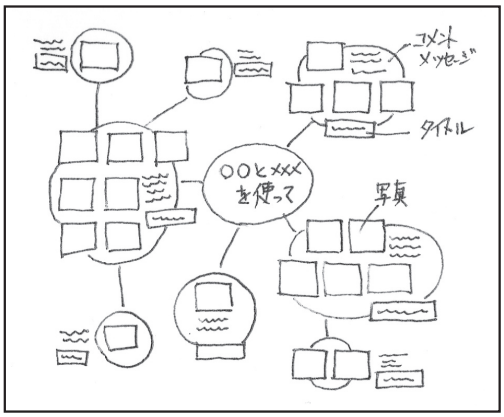


図２

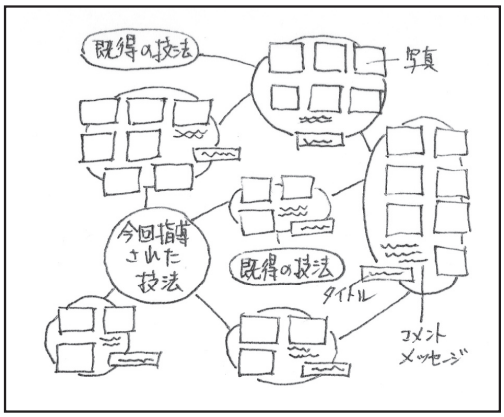


図３

図に示したように幼児のウェブ構造の方が複雑になっていくことが予想され、年齢の違いに

よる変化が分かりやすくなることも期待できる。また４月からの活動を時期ごとに順序立てて展示して、造形展までの期間内での変化を示すこともできるだろう。そしてこのことで、保護者が造形表現活動の全体像を大まかにでも捉え、子どもの興味・関心のありかを探り、それぞれの工夫や学びを見出して、理解を深めることを目指したい。

＜謝辞＞

本研究への協力をご快諾くださった理事長先生、園長先生、そして造形展に向けお忙しく大変な思いをされているにも関わらず「調査票」の作成にご尽力下さった３園の先生方、本当にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

（註・引用文献）

1 「誰もが・自分なりに」「誰もが・同じように」については、拙稿、四天王寺大学紀要短期大学部第58号「幼児造形指導の試み―豊かな表現を引き出すために―」を参照されたい。

2 同上

3 「乳児」の表記については、拙稿、四天王寺大学紀要短期大学部第56号「０～２歳児の造形あそびに関する一考察―自発的活動の造形的可能性について―」（p155）に示したように、０～２歳児をさすこととする。

4 「幼児」の表記については、拙稿、四天王寺大学紀要短期大学部第56号「０～２歳児の造形あそびに関する一考察―自発的活動の造形的可能性について―」（p155）に示した内容を基に、３～５歳児をさすものとする。

5 乳児の作品展については、拙著「０・１・２歳児の造形あそび　実践ライブ」（ひかりのくに）のpp105~111に詳しい。

6 J.ヘンドリック編著　石垣恵美子･玉置哲淳監訳「レッジョ･エミリア　保育実践入門　保育者はいま、何を求められているか」（北大路書房）p15

7 シルビア　チャード著、小田　豊監修、芦田　宏監訳、奥野正義・門田理世訳「幼児教育と小学校教育の連携と接続―協働的な学びを生かしたプロジェクト・アプローチ―」（光生館）p27